植民ならびに集落農業によって影響された人類の栄養

J. R. Braidwood (Chicago, U.S.A.)

1930年代の中頃、V. Gordon Child らによって提唱された理論、すなわち東西アジアの気候風土に秀れたある地域が、世界中で最も早い時期に食料生産および集落農業を営んで生活していたということは、第二次世界大戦後の現地調査により疑いのないところとなった。

少なくとも西暦紀元前七千年期の初頭までに小麦、裸麦、およびある種の豆類が栽培され、羊、山羊、豚それに、おそらくは牛が飼い馴らされていたようである。以上述べた先人の業績が、その後、続く時代の狩猟者や食料採集者たちの間に、環境良好な他地域をより積極的に利用しようとする傾向を強めるきっかけとなったことは、種々の有力な証拠から強張できる。この植民あるいは植民した地域での積極的な農耕活動の増加が、西暦紀元前七千年前の時代に、非常な食糧増産増加のあったことを示している。

食餌上の変化が各地域の特殊化、および食料取得の習慣の確立をもたらしたことは、容易に相像できる。より効果的な食糧生産を行なうという勢、および穀物の栽培に成功した結果、より一層顕著な食餌的变化が期待されるであろう。

我々が部分的発掘を行なって得た考古学的収獲は、ほんの少しの植物および動物を含んでいた。これらの植物および動物の形態は、人類が消費する可能性のある種類に属することが確認されたことから、我々はそれらが食物として利用されていたものと推定している。しかし個々の種類について、それぞれの程度の量が食餌に供されていたか、また、1年のどの季節に食したのかについては、まったく判っていない。

簡単な一例として、北東イラクにある Jarmo の古い村落跡をとりあげてみよう。ここは、西暦紀元前七千年期の前半頃、おそらくは8250年前頃にあった部落の跡である。面積は3ないし4エーカー（一ヘクタール）にわたっており、25戸の家があったようである。しかし、我々の行なった一部分の発掘では、一地層当り3戸以上の家があったことを明らかにすることはできなかった。もっとも深く掘った部分つまり約7メートルの堆積土のあった部分には、12から15の層があった。この地域の小部落から類推すると、一地層の25戸の家に約150ないし200人の人口があったと思われる。

Jarmoで収集した動物の骨片についての最終的な研究結果は間もなく得られる見込みである。厳密

な統計処理は未だ終了していないが、羊と山羊の双方は飼育されていたのに、野生の羊および山羊も利用していたことは明らかのように思われる。野生の豚は発掘したどの層からも現われたが、飼い馴らされた豚は地表近くの層にしか現われなかった。明らかに飼い馴らされたと考えられる犬の骨も少量みづかった。牛、鹿、ガゼルおよびその他の哺乳動物の骨も少量ながら、野生の状態のものがみづかった。しかし、毎日どの程度の量の肉が一世帯で使われていたか、全く何とも言えない。牛乳あるいはチーズを利用した形跡はなかった。Jarmoの人たちは非常に多量の蛇、特に *Helix (Naeglelea) salomonica* を収集していたようであるが、これに反して魚の骨と淡水産カニのはさみは極微量しか発見されなかった。

Hans Hebaek 博士は、diploid ならびに tetraploid 小麦の両方および Jarmo の two-row barley の穀粒と焦げた穀粒の痕跡の双方を見いだした。わずかな種類の acorn, pistacho nuts, 扁豆およびエンドウ豆のそれぞれもほんの少量であるが、やはり Hebaek 博士によって発見された。Khuzistan の上層部分における全ての Kosh において、魚骨量の増加、蛤殻および海亀の甲によって大河の存在していたことが認められ、野生ろばの骨によって広大な平原のあったことがうかがえる。しかし、他の種類は基本的に Jarmo の場合と類似していた。

一万二千年前南西アジアの人々の間で明らかに高まった傾向、つまり環境の異なる種々の地域へ植民し、そこで生活を営むため農耕適応を行なうという傾向、によって影響された人類の栄養に関する有意義な解釈を得ることは、おそらく今から二〜三代のうちに可能であろう。

少なくとも一万年前、人類がある環境下で植民し定着していくというこの傾向は、食糧の効果的生産および集落農業による生活を営む基盤となったであろうところのある種の植物および動物の前述のような取り扱いかたをした結果生じたものであることを、我々は確信している。

新しい生活様式の確立が人類の各方面における活動分野に効果をおよぼすことを推定するのは当然である。しかし現在実際の人類の生物学的進歩、およびこの先人の成果は、今なお明らかになっていない。

（本稿は第7回国際栄養学会議において行なわれた発表の要旨である。）